

記憶に残った一枚の写真

こばやし なおあき
小林 直明
民博 プロジェクト研究員



写真からアフリカ調査を振り返りました
音楽グループの集合写真。右端は筆者（2005年）

フィールドでえた発見・知恵は、たとえフィールドが変わっても活かすことができる。現在はコンピュータ、情報処理の分野に活動の場を広げている筆者が、アフリカ調査の経験を一枚の写真から振り返り、道を切り開くヒントを伝える。

今年の五月より「地域研究画像デジタルライブラリ（通称DIPLAS）」というプロジェクトで働いている。そのむかしフィールドにおいて撮影されたスライド写真などをデジタル化・データベース化して、現在進行中の研究に役立ててもらったための支援プロジェクトである。年間数万点にのぼる他人が撮った写真を処理していかなければならない仕事で、当然のことながら一枚一枚の写真の背景にあるエピソードや撮影者の意図などに想いを馳せている余裕はない。ここでは普段の仕事から離れて、わたし自身が撮った一枚の写真をじっくりと見ていきたいと思う。

アフリカに通う理由

下の写真は今から十数年前に、フィールドのタンザニア、ダルエスサラームで撮影したものである。真ん中に写っているのはスネアドラム、その傍らにはハイハット・シンバルが写っている。これらはわたしがその成り立ちを調査していた下町コミュニティに暮らす若者たちが結成した、とある音楽グループの所有物である。まずは左端に写っているハイハットを見てもらいたい。シンバルの縁が割れて、ところどころ欠けてしまっている。またその下方には上下二枚のシンバルを開閉するためのペダルが付いているが、こちらはとうやら木片で手作りしたパーツに交換されているようだ。修繕しながら、ずいぶん使い込まれた楽器だとわかる。次に、スネアドラムのヘッド(打面)の部分の部分を注意深く見てもらいたい。これも先ほどのペダル同様の作りで置き換えられている。写真ではわかりづらいかもしれないが、何かを縫い合わせて作ったのだろう、縫い目の線が縦横に、二重二重に走っているのわかる。全体的に黒っぽい色だが、ヘッドの下半分に何やらイカのよつな白い影が写っているように見える。さて、読者のみなさんはこの「ドラムヘッド」の材料が何であるか、おわかりだろうか。



問題の写真。中央、スネアドラムのヘッド(打面)の材料は何でしょう？(2005年)

まさにこれであろうと改めて思うのである。

フィールドと教室を一枚の写真がつなぐ

ところで、わたしが感服してやまない、この名もない人びとの英知を何とよべばよいだろうか。文化人類学の用語で表現するとすれば、「プリコラージュ」が適当だろう(ありあわせの道具と材料を用いて自分の手で何かを作りあげたり繕ったりすることで、理論や設計図に基づいてものを作るエンジニアリングに対置される概念だ)。「プリコラージュ」に似たことばで、最近特にビジネスの世界において注目されるようになった「ジューガード」も捨てがたい。「ジューガード」はもともとインドのパンジャブ語で、荷車に「ディーゼルエンジン」を載せて作った急ごしらえのトラックのことらしい。(当地の事情を伝える新聞記事などによると)普通の自動車を買う余裕のないインド北部の農民のあいだで広く普及し、公共交通機関の代役も務めているという。転じて「革新的な問題解決の方法」とか「独創性と機転から生まれる即席の解決法」を意味することばとして用いられるようになった。

わたしはこの写真とエピソードを、非常勤先の大学で担当している情報系の演習科目で紹介することにした。情報処理の話は、とかくエンジニア的な発想に辺倒になりがちだと感じているからだ。「常識的なやり方では解決できないような問題に遭遇したとき、適当な道具や材料がないからといって簡単にあきらめてしまっただけではなく身の回りにあるものを活かしてなんとか切り抜けている能力シユガード的な精神をひとつの選択肢としてもち合わせておくことは、情報処理の分野に限らず人生のあらゆる局面において大切ではないだろうか」といった趣旨の話である。「コンピュータの授業」に突然アフリカやインドの話が出てきて、ポカンとしている学生も少なくないのだが。

タンザニア、
ダルエスサラーム



上：練習風景。手前のソンゴマ(太鼓)やマリンバはメンバーの手作り(2005年)
下：授業風景(2017年)

